聡明にして、直感的。柔和にして、確信的。
眼前に広がる、エレーヌ・グリモーだけの世界

近年のピアノ界の進化は目覚ましく、世界のみならず日本国内でも極めて優秀なピアニストが次々と楽壇に登場しているのは私たちにとっても嬉しい限りである。そんなピアニスト百花繚乱の現代においても、エレーヌ・グリモーのピアノは特別だ。

15歳でのCDデビュー以降、瞬く間に楽界のスター・ピアニストとなったグリモーは、その美貌と、ニューヨークに狼を研究する施設「ニューヨークウルフセンター」を設立するなどといった側面も注目されがちだが、何より素晴らしいのは、言わずもがな音楽である。熟慮を重ねた分析と、まさに狼を思わせるような動物的直感の両立、また柔らかでありながら限りない芯の強さを感じさせる確信的な音色は、他では決して聴けない。彼女の演奏を耳にすると、人間、いや生物としての根本を考えさせられるのは、私だけではないだろう。

2018年に予定していた来日は中止となったため、今回のリサイタル日本公演は来日8年ぶりとなる。フランス生まれながらドイツ・レパートリーをこよなく愛する、実にグリモーらしいプログラムで、じっくりとその世界を堪能したい。

© Mat Hennek / DG

Hélène Grimaud
Piano Recital

Profile

エレーヌ・グリモー (ピアノ)
Hélène Grimaud, piano

エクサンプロヴァンスで生まれ、地元の音楽院でジャクリーヌ・コータンにピアノを学び、その後マルセイユでピエール・バルビゼに師事した。わずか13歳でパリ国立高等音楽院に入学し、わずか3年後にはピアノ演奏で1等賞を獲得した。その後、ジェルジ・シャーンドル、レオン・フライシャーに師事し、1987年に東京でデビュー・リサイタルを開き、好評を博した。ダニエル・バレンボイムに招かれ、パリ管弦楽団と共演したのがグリモーの音楽活動の始まりで、以来、世界の主要オーケストラや多くの著名な指揮者と共演している。また、室内楽奏者としても、ソル・ガベッタ、ロランド・ビリャソン、ヤン・フォーグラー、トルルス・モルク、クレメンス・ハーゲン、ギドン・クレーメル、ギル・シャハム、カピュソン兄弟など、さまざまな音楽家と一流のフェスティヴァルや文化イベントで共演している。

2002年以来、ドイツ・グラモフォンの専属アーティストとして活動している。常に新たな境地を開拓する彼女の数多くの録音は絶賛され、カンヌ・クラシック・レコード大賞、ショク・ドゥ・モンド・ドゥ・ラ・ムジーク、ディアパソン・ドール、グラン・プリ・ドゥ・ディスク、レコード・アカデミー賞、ミデム・クラシック賞、エコー・クラシック賞など、数多くの賞を受賞している。

クラシック音楽界への多大な貢献と影響は、フランス政府によって認められ、フランス最高位の勲章であるレジオンドヌール勲章にシュヴァリエ(騎士)の位で受章した。

彼女はまた、絶滅危惧種であるオオカミを保護する環境保護活動家“ミュージシャンズ・フォー・ヒューマン・ライツ”という団体のメンバーとしての人権活動家、文筆家としての 顔も持ち、まさに“ルネサンス・ウーマン”である。